



《ジェネラリストBOOKS》
病歴と身体所見の診断学
検査なしでここまでわかる
徳田 安春 著

●A5 頁210 2017年11月
定価：本体 3,600 円＋税
[ISBN978-4-260-03245-2]医学書院刊

クリニックの外来に備えておくべき必読書が出版されました。これを読破し目の前の患者さんに応用すれば、日常診療のコモンな症候に対して、検査なしで診断に迫れます。開業医も高齢化が進んでおり、読みやすい(文字が大きい)、わかりやすい、患者さんに簡単に応用できる臨床本が必要です。ある症候に遭遇した際に、診断の肝(キモ)である病歴を聴取し身体診察を行い、陽性と陰性所見を数値化し、それを合算して、診断の確からしさを導き出します。数値が高ければ、診断の確からしさ(検査後確率)が高まり、検査は確認するだけの作業になります。検査偏重の自分から脱却できるかもしれません。例えば熱があるから条件反射的にインフルエンザ迅速検査、CRP 検査を行う必要がなくなり、疾患の確率を考えて検査する医師に変貌できます。

第1章では、徳田安春先生と上田剛士先生の熱い思いが語られています。お二人とも「21 世紀適々斎塾」(大阪開催)の理事であり、臨床推論の達人です。この本と上田先生執筆の『ジェネラリストのための内科診断リファレンス』(医学書院、2014)があれば、開業医にとっては鬼に金棒でしょう。

第2章は19 種類の各論から構成されており、コモンな症候から診断の確からしさを推測します。

「症候1」は、風邪症状がインフルエンザらしいか否かについてです。当院で研修中の研修医、看護師、私で、どこまでインフルエンザに迫れるか応用してみました。インフルエンザの確定診断は迅速検査陽性とし、まず、検査前確率を推測します。流行していれば、10%くらいになりますし、流行していなければ、0.1%

になります。患者さんの症状と所見から尤度比を導き、それらを合算します。ノモグラムを使い、検査前確率と尤度比から検査後確率を算出します。尤度比が高ければ診断精度も高くなり、検査を行わなくても、結果は推測可能となります。使用方法に慣れてくると、医療関係者自身の診断確率が高まります。インフルエンザの流行時期にこの方法を繰り返せば、インフルエンザ診断の達人になれるはずですが、実際に当院では、「どれくらい、インフルエンザらしい？」という質問に研修医が解答できるようになってきました。なんとも同じ作業を繰り返すことが大切です。

インフルエンザ以外にも脱水、肝硬変、呼吸困難、肺炎、咽頭痛、胸痛、腹痛、腹水、腰痛、下腿腫脹、めまい、手のしびれ、手のふるえ、低アルブミン血症、アルコール依存、原因不明の身体症状が取り上げられています。これらの症候に対し尤度比算出を繰り返すと、重要な問診と診察が自然にマスターできます。

いやあ、医者の仕事って本当に楽しいです。患者さんから一生懸命に話を聴き、的確な診察をすれば自然に正しい診断ができる。これって、開業医(プライマリ・ケア医)の真骨頂だと思いませんか？ 対談の中で、“もし本書を入門書として読めば、日本の医療の質が変わる可能性がある”と記述されています(p. 29)。あなたも、明日から自分自身の医療を変えてみませんか！

本を購入すれば、「尤度比一覧(診断に役立つ症状・所見一覧)」のPDF を医学書院 web サイトからダウンロードできます。私は、電子カルテにPDF を置き診療に役立てています。素晴らしい時代になったものです。